千里金蘭大学紀要　9　67－75（2012）

＜原著論文＞

育児参加は父親にどのような影響を与えるか
－多胎児の父親と単胎児の父親との比較－

What kind of influence does childcare participation have on fathers?
— Comparison with the fathers of twins and singletons —

林　知里[1]，岡本　愛花[2]，神林　優花[3]，花田　佳奈[4]，渡邊　えみ[5]，中島　美繪子[6]

要　旨

近年、男女共同参画社会の実現、少子化問題、子どもの社会性の発達や父親自身の人格的成長、QOLやワーク・ライフ・バランスなどとの関連において、父親の育児参加が注目されている。多胎児の父親は単胎児の父親より積極的に育児参加するものが多いとの報告があるが、育児参加が父親に与える影響について多胎児と単胎児の父親を比較した調査はない。そこで、本研究では、多胎児と単胎児の父親の「子育て観・次世代育成観」「母性神話」「仕事観」「子ども観」を調査した。ツインマザースクラブの会員1016名に自己記入式アンケートを郵送、211名の父親から回答を得た（回収率20.8%）。また、比較群として、小中一貫校の児童・生徒および大学生の単胎児の父親300名にアンケート調査を実施し、101名から回答を得た（回収率33.7%）。結果、「子どもが３歳になるまで、母親は育児に専念するほうがよい」「子どもを出産した後は、母親は仕事をやめたほうがよい」といった、いわゆる「三歳児神話」や「母性神話」については、多胎児の父親は単胎児の父親と比較して反対側が有意に多かった。「子育ては自分の自由な時間を奪う」「仕事は自分の自由な時間を奪う」「子育て中は、勤務時間を自分で調整できる方がよい」は多胎児の父親で賛成側が有意に多く、「育児休暇をとると昇進にひびく」は、多胎児の父親で反対側が有意に多かった。ふたごの父親は、単胎児の父親と比較して積極的に育児参加している者が多く、育児の担い手として実質的に育児に関わる経験が母性神話に対する価値観や子育て観、仕事観に影響している可能性が示唆された。

キーワード：ふたご，父親，育児参加，母性神話，子育て観，仕事観
twin, father, childcare participation

緒言

男女共同参画社会の実現のための政策が進められる中、女性の就労参加に比べて男性の育児参加は遅れているのが現状である。これまでの研究において、父親の育児参加が母親の育児負担感や否定的感情の軽減につながること[1－3]、また、子どもの発達を促進すること[4－6]が報告されている。さらに、近年、親になる経験や子育ての経験を個人の生涯発達プロセスの中に位置づけ、育児参加によって生じる父親自身の発達に関する研究が盛んに行われている[7－10]。最近の研究[11]では、父親の育児参加は、家族・家庭への貢献感から健康関連QOLに直接的に影響し、また、夫婦関係満足感ならびに精神的健康を通して健康関連QOLに間接的に影響することが明らかとなっており、父親のQOLの観点からも父親の育児参加の重要性が示唆されている。

父親の育児参加を促進する要因としては、１.

受理日：2012年10月31日

1　Chisato HAYASHI　元千里金蘭大学看護学部　現大阪大学大学院医学系研究科附属ツインリサーチセンター
2　Aika OKAMOTO　市立豊中病院
3　Yuka KANBAYASHI　淀川キリスト病院
4　Kana HANADA　市立池田病院
5　Emi WATANABE　三木市民病院
6　Mieko NAKASHIMA　元千里金蘭大学看護学部

「ニーズ仮説」：末子の年齢が低い、子どもの数が多いなど、家事・育児量が多い場合に父親の参加が高まる。2.「相対的資源仮説」：学歴・収入・年齢などの社会的資源が夫より妻のほうが高い場合に夫の参加が高まる。3.「代替資源仮説」：同居の祖父母など父親に代わる家事・育児の担い手がいると父親の参加は低下する。4.「時間的制約説」：労働時間の長い父親は家事・育児参加が少ない。5.「イデオロギー仮説」：性別役割分業意識の高い父親は育児参加が少ない。6.「情緒的関係仮説」：夫婦関係が良好であれば夫の育児参加が高まるなどの仮説がある[12]。尹（2011）[13] は、末子の年齢が低いほど父親の育児参加が増大していたが、子どもの数は育児参加に影響していなかったと報告している。また、祖父母との同居は父親の育児参加を減少させ、父親の帰宅時間が遅いほど、また、母親の出勤時間も遅いほど父親の育児参加が減少していたことを明らかにした。性役割意識と家事・育児との関連はなかった。一方、高瀬（2005）[14] は、生後3ヶ月児をもつ父親を調査し、育児の共同化意識がある人、妻への配慮の気持ちがある人、子ども好きな人ほど育児行動をしていたと報告している。また、中野（1992）[15] は、夫の家事・育児行動と妻の就業行動は夫婦の間で相関関係にあったことを明らかにし、夫と妻の意思決定は独立ではなく、夫婦が家計全体の効果を最大にするよう意思決定をしている可能性を示唆している。また、妻の年齢が夫の家事・育児遂行に有意に負の影響を与えていたと報告し、妻の年齢が低く、夫の意識が性別役割意識から希薄であるほど、夫が家事・育児に関わる傾向が高かったと報告している。

一方、多胎児家庭は、子どもが乳幼児期において特に育児負担が大きく、精神健康度が悪化していることや母親の育児不安が強いことが報告されている[16-18]。北岡ら（2002b）[19] は、双子の母親の方が単胎児の母親に比べて、育児や家事のサポートや情緒的なサポートを有意に高く希望していること、また、横山（1997）[20] は、育児協力者の有無による疲労の程度を比較し、育児協力者がいる母親の方が精神的疲労、イライラ感が有意に低かったことを明らかにしている。このように、多胎児の父親は、単胎児の父親と比較して、積極的な育児参加を求められると考えられ、実際、双子の父親は単胎児の父親よりも育児に多く関わっているという報告もある[17]。しかし、育児に多く関わっているとされる多胎児の父親と単胎児の父親の子育て観や次世代育成観、母性神話に対する価値観、仕事観などの違いについて検討したものはほとんどない。そこで、本研究では、多胎児と単胎児の父親の「子育て観・次世代育成観」「三歳児神話」「母性神話」「仕事観」「子ども観」を調査した。

方法

ツインマザースクラブの会員1016名に自己記入式アンケートを郵送し、211名の父親から回答を得た（回収率20.8％）。調査内容は、子育て観・次世代育成観（14項目）、母性神話（3項目）、仕事観（17項目）、子ども観（20項目）であった。子育て観・次世代育成観については、杉山（2010）[21] を参考に、仕事観及び子ども観については、福丸（1999）[22] を参考に作成した。各項目において、「そう思わない：1点」から「そう思う：4点」の4段階で回答してもらった。また、比較群として、小中一貫校の児童・生徒および大学生の単胎児の父親300名にアンケート調査を実施し、101名から回答を得た（回収率33.7％）。

分析には、SPSS17.0を使用した。また、父親の自由記載内容については、同じような内容を述べているものをカテゴリーごとに分類し、カテゴリー名をつけた。妥当性を高めるため、複数の研究者に分析途中から意見をもらい、内容をチェックしてもらった。

本研究は、千里金蘭大学倫理委員会の認可を得て実施した。

用語の定義

「三歳児神話」

「子どもが三歳までは母親のもとで育てないと、子どもの発達に悪い影響を与える」という考え。本研究では「子どもが3歳になるまで、母親は育児に専念するほうがよい」という質問を用いて父親の意識を調査した。

「母性神話」

「子どもを産んだ女性には、誰にでも等しく母性愛が備わっており、母性愛は本能的な欲求である」という考え。本研究では、「子どもを出産した後は、母親は仕事をやめたほうがよい」という質問を用いて父親の意識を調査した。

結果

1．対象の属性

表1に対象者の属性を示す。分析に使用した双子の父親の年齢は49.2±8.6歳（平均±SD）、母親の年齢は46.4±7.7歳、単胎児の父親の年齢は46.9±6.3歳、母親の年齢は44.6±6.5歳であった。子どもの数は、多胎家族は2.2±0.6人、単胎児家庭は2.4±0.6人であった。全サンプルでは、父親の年齢48.5±8.0歳、母親の年齢45.8±7.4歳、子どもの数2.3±0.6人であった。

全サンプルの父親の職業は、会社員192人（62.7％）、自営業・会社経営45人（14.7％）、公務員40人（13.1％）、専門職14人（4.6％）、教員11人（3.6％）、その他４人（1.3％）で、母親の職業は、主婦214人（70.2％）、会社員22人（7.2％）、パート・アルバイト16人（5.2％）、教員12人（3.9％）、公務員12人（3.9％）、自営業・会社経営11人（3.6％）、専門職９人（3.0％）であった。

2．子育て観・次世代育成観および母性神話

子育て観・次世代育成観の各項目得点において、単胎児の父親と多胎児の父親で有意な差は認められなかった（表２）。「子育てには、スキンシップが大切である」の項目で両群とも最も得点が高く、単胎児の父親で3.66±0.57（平均±SD）点、多胎児の父親で3.69±0.52点であった。次いで得点が高かったのは、「子育ては、男女ともに協力して行うものである」、「子どもがよいことをしたら、それが自分の子でなくてもほめることが大切である」であった。最も得点が低かったのは、「近所のひとや友人に「半日子どもを預かってほしい」と頼まれたら、自分にとくに用事がない限り、その子どもの世話をしたい」の項目で、単胎児の父親2.57±0.91点、多胎児の父親2.59±0.89点であった。

「子どもが３歳になるまで、母親は育児に専念するほうがよい」の項目については、単胎児の父親3.09±0.94点、多胎児の父親2.84±1.01点であり、「子どもを出産した後は、母親は仕事をやめたほうがよい」の項目は、単胎児の父親2.33±0.99点、多胎児の父親2.03±1.01点であり、多胎児の父親は単胎児の父親と比較して、いわゆる「三歳児神話」「母性神話」に反対側が有意に多かった（$p<0.05$）。

3．子ども観

表３に子ども観の得点（単胎児と多胎児の父親の

表１　対象者の属性

		全サンプル（N=306）	多胎家庭（N=208）	単胎家庭（N=98）
父親の年齢	（歳）	48.5±8.0	49.2±8.6	46.9±6.3
母親の年齢	（歳）	45.8±7.4	46.4±7.7	44.6±6.5
子どもの数	（人）	2.3±0.6	2.4±0.6	2.2±0.6
父親の職業	人（％）			
	会社員	192（62.7％）	127（61.1％）	65（66.3％）
	会社経営・自営業	45（14.7％）	33（15.9％）	12（12.2％）
	公務員	40（13.1％）	26（12.5％）	14（14.3％）
	専門職	14（4.6％）	11（5.3％）	3（3.1％）
	教員	11（3.6％）	10（4.8％）	1（1.0％）
	その他	4（1.3％）	1（0.5％）	3（3.0％）
母親の職業	人（％）			
	専業主婦	214（70.2％）	143（69.1％）	71（72.4％）
	会社員	22（7.2％）	18（8.7％）	4（4.1％）
	会社経営・自営業	11（3.6％）	8（3.9％）	3（3.1％）
	公務員	12（3.9％）	8（3.9％）	4（4.1％）
	専門職	9（3.0％）	6（2.9％）	3（3.1％）
	教員	12（3.9％）	11（5.3％）	1（1.0％）
	パート・アルバイト	16（5.2％）	5（5.3％）	11（11.2％）
	その他	8（2.6％）	7（3.4％）	1（1.0％）

表２　子育て観・次世代育成観および母性神話の得点　（単胎児と多胎児の父親の比較）

	単胎児（N=98）	多胎児（N=208）	
子育ては、男女ともに協力して行うものである	3.57 ± 0.57	3.59 ± 0.61	
子育ては、若者から高齢者まで、様々な年齢層の人が協力して行うものである	3.23 ± 0.84	3.26 ± 0.82	
子育ては、実の親でなくても愛情があればできる	3.05 ± 0.91	2.88 ± 0.91	
子育てには、スキンシップが大切である	3.66 ± 0.57	3.69 ± 0.52	
子育てには、地域の協力や社会の支援が大切である	3.24 ± 0.72	3.32 ± 0.69	
子どもは、社会全体で育てられる存在である	3.23 ± 0.73	3.28 ± 0.75	
子どもが問題行動をしていたら、それが自分の子でなくても注意することが大切である	3.35 ± 0.61	3.39 ± 0.64	
子どもがよいことをしたら、それが自分の子でなくてもほめることが大切である	3.56 ± 0.64	3.54 ± 0.57	
近所のひとや友人に「半日子どもを預かってほしい」と頼まれたら、自分にとくに用事がない限り、その子どもの世話をしたい	2.57 ± 0.91	2.59 ± 0.89	
地域での活動や仕事などを通じて、子どもたちとかかわりをもちたい	2.58 ± 0.84	2.70 ± 0.82	
次世代の育成は、人としての責任である	3.33 ± 0.69	3.41 ± 0.62	
子どもが3歳になるまで、母親は育児に専念するほうがよい	3.09 ± 0.94	2.84 ± 1.01	*
子どもを出産した後は、母親は仕事をやめたほうがよい	2.33 ± 0.99	2.03 ± 1.01	*
母親が働いている子どもはかわいそうだ	2.09 ± 1.02	1.87 ± 0.93	

*p<0.05

表３　子ども観の得点　（単胎児と多胎児の父親の比較）

	単胎児（N=98）	多胎児（N=208）	
子どもは自分の分身だ	2.63 ± 1.13	2.50 ± 1.15	
子どもを見ていると元気づけられる	3.62 ± 0.62	3.60 ± 0.55	
子どもは心の支えである	3.51 ± 0.65	3.46 ± 0.66	
子どものおかげで自分も成長する	3.55 ± 0.63	3.56 ± 0.58	
子どもは自分の人生を豊かにする	3.57 ± 0.61	3.61 ± 0.58	
子育ては自分の自由な時間を奪う	1.94 ± 0.92	2.18 ± 0.94	*
子どもをもつことは経済的な負担が大きい	2.92 ± 1.00	2.94 ± 0.94	
子どもをもつと精神的に休まらない	1.62 ± 0.71	1.71 ± 0.79	
子どもをもって初めて社会的に認められる	2.04 ± 1.02	2.00 ± 0.93	
子どもをもつのは人間として自然なことである	3.12 ± 0.90	3.11 ± 0.85	
社会を担う次世代育成のために子育ては大切だ	3.39 ± 0.72	3.48 ± 0.60	
子どものいない人生はむなしい	2.74 ± 1.12	2.59 ± 0.99	
自分にとって何より大切なのは子どもである	3.14 ± 0.94	2.99 ± 0.86	
子どもは自分にとって生きがいである	3.22 ± 0.89	3.08 ± 0.79	
子どもを育てることに対して余り関心が持てない	1.41 ± 0.59	1.39 ± 0.55	
子どもを好きになれない	1.17 ± 0.43	1.24 ± 0.50	
子どもをうっとうしいと思う	1.21 ± 0.52	1.34 ± 0.59	
自分にとって子どもはあまり大きな価値をもたない	1.22 ± 0.44	1.26 ± 0.53	
子どものために仕事が満足にできない	1.22 ± 0.47	1.33 ± 0.58	
自分がいなくても子どもは育つ	2.23 ± 1.07	2.14 ± 0.95	

*p<0.05

比較）を示す。子ども観の項目のうち、最も得点が高かったのは、両群ともに「子どもを見ていると元気づけられる」で、単胎児の父親3.62±0.62点、多胎児の父親3.60±0.55点であった。次いで得点が高かったのは、「子どもは自分の人生を豊かにする」「子どものおかげで自分も成長する」であった。得点が低かったのは、「子どもを好きになれない」「子どもをうっとうしいと思う」「自分にとって子どもはあまり大きな価値をもたない」「子どものために仕事が満足にできない」の項目であった。単胎児の父親と多胎児の父親で差がみられたのは、「子育ては自分の自由な時間を奪う」の項目で、単胎児の父親1.94±0.92点、多胎児の父親2.18±0.94点で、多胎児の父親は賛成側が有意に多かった（$p<0.05$）。

4．仕事観

表4に仕事観の得点（単胎児と多胎児の父親の比較）を示す。仕事観で最も得点が高かったのは、「仕事で頑張るには家族の理解が大切である」の項目で、単胎児の父親3.55±0.72点、多胎児の父親3.50±0.68点であった。次いで、「仕事の目的は、経済的に家族を支えることである」「仕事と子育ての両立には、上司や同僚の理解が必要である」の項目で得点が高かった。得点が低かったのは、「家族のことより仕事を優先させたい」で、単胎児の父親で2.15±0.85点、多胎児の父親で1.98±0.77点であった。

「仕事は自分の自由な時間を奪う」は、単胎児の父親2.43±0.98点、多胎児の父親2.70±0.98点、「子育て中は、勤務時間を自分で調整できる方がよい」は、単胎児の父親3.05±1.00点、多胎児の父親3.32±0.75点で、多胎児の父親で賛成側が有意に多く（$p<0.05$）、「育児休暇をとると昇進にひびく」は、単胎児の父親2.60±1.11点、多胎児の父親2.25±1.00点で、多胎児の父親で反対側が有意に多かった（$p<0.05$）。

5．自由記載欄

【必然的に育児に関わらざるを得ない状況と父親の覚悟】

〈双子には母親が二人必要です。母親になってあげてください。〉

〈父親が育児参加しなければ、母親はどうしようもなくなってしまう。〉

〈サポートするという発想では逆効果を生みます。父子家庭になったような覚悟を持つ。〉

〈双子の父になったらあきらめて腹を据えること。やるしかないので。〉

表4　仕事観の得点（単胎児と多胎児の父親の比較）

	単胎児（N=98）	多胎児（N=208）	
仕事は人生に充実感をもたらす	3.27±0.77	3.24±0.89	
仕事で頑張るには家族の理解が大切である	3.55±0.72	3.50±0.68	
仕事は自分にとって生きがいである	2.54±0.93	2.74±0.95	
仕事がうまくいくことは、子育てにも良い影響を与える	3.22±0.90	3.30±0.80	
仕事を通して自分が成長する	3.34±0.70	3.32±0.75	
仕事は自分の自由な時間を奪う	2.43±0.98	2.70±0.98	*
仕事は家族とかかわる時間を奪う	2.63±0.98	2.76±0.97	
仕事をしないですむなら、それに越したことはない	2.45±1.23	2.47±1.16	
家庭のことより仕事を優先させたい	2.15±0.85	1.98±0.77	
仕事をすることは社会的義務である	3.15±0.93	3.12±0.91	
仕事の目的は経済的に家族を支えることである	3.53±0.71	3.44±0.69	
子育て中は、勤務時間を自分で調整できるほうがよい	3.05±1.00	3.32±0.75	*
子育て中は、できるだけ残業はしたくない	2.91±1.04	3.06±0.93	
要領良く仕事をして早く帰宅することは、やる気になれば誰でもできる	2.56±1.15	2.37±1.02	
仕事と子育ての両立には、上司や同僚の理解が必要である	3.38±0.74	3.42±0.76	
子育てを理由に仕事時間を減らすと昇進にひびく	2.58±1.00	2.35±0.99	
育児休暇をとると昇進にひびく	2.60±1.11	2.25±1.00	*

*$p<0.05$

〈気力・体力・経済力それぞれに大きな負担が伴います。多胎の育児をするには、それ相応の「覚悟」が必要。〉
〈気合で頑張ってください。心が折れたらおしまいです。〉
〈父親の協力なくして双子は育てられない。〉
〈気合と根性です。体力は必須です。〉
〈経済的な大変さは予測できるだろうが、体力、協力がこれほどまでに必要と思っている方は多くないはず。〉
〈「双子はかわいい」それだけではやっていけない。〉

【ふたごの父親ならではの体験】
「周囲からの注目、関心」
〈ふたごのパパとして、どこでもすぐに顔を覚えられ、交流が広がりやすい。〉
〈小さい頃、二人を連れていると目立ってよかった。〉
〈双子と言うと、子育ての話がはずむ。〉
〈外で多くの人に声をかけられる。〉
〈すぐに覚えてもらえます！〉
「ふたごの絆」
〈双子同士の協調、競争などがおもしろく、人生のすばらしい体験。〉
〈双子の結びつきの強さは、兄弟の比ではない。そんな我が子たちの成長にしっかりと立ち会うことができた。〉
〈子ども同士で笑い合ったりしているのを見ると、双子ならではだなあと感じる。〉
〈二人が切磋琢磨する姿やお互いに助け合う姿などがみられた。〉
〈親としてどれだけ接しようが、この二人の関係の強さには敵わないのだろうなあと思うとなんだかうれしくなる。〉
「ふたご育児の特別感」
〈双子のお父さんとは育児価値観をすぐに共有できる。〉
〈両手に抱っこをすると幸せを感じる。〉
〈だれでもできない経験（双子の育児）をしている。〉
〈喜怒哀楽がいっぱいの生活。〉
〈多様な価値観を与えてくれる。〉
〈マイノリティなので特別感がある。〉
〈双子のお父さんとは「同志」というか、やった人にしか分からない苦労がうかがえる。〉

【人間の持つ多様性、個性への気づき】
〈一人ひとり個性があるから、双生児として同じ目でみないで個人を伸ばす教育に力を入れてほしい。〉
〈ふたりの子供に「きょうだい」の区別を付けることなく、同じように育てること。また劣る方に焦点を当てることなく優れた才能を積極的に伸ばすようにすること。〉
〈それぞれの個は別。ひとまとめにして扱わないこと（失敗談）〉
〈人は各々が異なり、個性があることを実感した。〉
〈人間の生まれながらに持っている個性の違いを実感できた。〉
〈個性は育て方、環境に左右されず人間は生まれながらにもっていることと分かった。〉
〈一卵性で似ていると思っていたが、成長とともに違いがわかってきた。人間はそれぞれであることを体験できた。双子という特殊な子育てに関われた。〉
〈二人の違いが面白い。〉
〈一卵性双子であったが、いつ何が原因（引き金）となり性格などに差異が生じてくるのか、観察できたことがよかった（面白かった）。〉
〈全く同じように育てているつもりなのに、やっぱり行動などに個性が出るので、もともともっているものは十人十色なのだなあと思いました。こう思うと、何となく安心して育てられましたし、心理的な負担も減りました。〉
〈多胎とはいえ、二人がそれぞれの個性をもち、それぞれの体格、性格、考え方、感じ方をもち、双子として二人は生きています。周囲の人々からは二人が“一緒”だとか“同じ”だとか思われがちですが、実際、親の目から見ると全く違う“個人”です。親としてはそれぞれの長所・短所を見極め、しかったり、ほめたりして育ててきたつもりです。〉
〈特に双子でも個々の性格などは異なることを意識して接することが重要と思います。〉
〈誕生の際は二人の子どもがとにかく平等に同等の人生を送ってほしいと願った。人から違いを指摘されるのも嫌かなと思った。字画数も揃えたぐらい（私が名付けました）。母親は「どちらがお姉ちゃん？」と聞かれるのを嫌がった。子どもに対しても当然ながら姉妹などで位置づけは全くしなかったし、やってはいけないと思った。今ではそれぞれの個性の違い、共通点を楽しませてもらっている。〉
〈ふたご=同じ、そっくりという一般的な価値観に世間や私たち親は知らず知らずにとらわれてしまい

がちですが、全く別人格として彼らの意見や考えを尊重することは大事だなと思います。彼らが安心して「同じでもいい、違っていてもいい」という空間創りを今後も心がけていきます。〉

考察

子育て観・次世代育成観の各項目について、単胎児の父親と多胎児の父親で有意な差は認められなかった。その理由として、子育て観・次世代育成観の項目が一般的な価値観を問うものであったため、個人の経験の影響が反映されにくいためと考えられる。

一方、「子どもが３歳になるまで、母親は育児に専念するほうがよい」および「子どもを出産した後は、母親は仕事をやめたほうがよい」といった、いわゆる「三歳児神話」や「母性神話」の項目について、多胎児の父親は単胎児の父親と比較して反対側が有意に多かった。これは、特に育児負担が高いと言われる乳幼児期において、多胎児の父親が育児参加を求められることが多く、実際に育児参加をした実体験が影響し、「三歳児神話」や「母性神話」に反対側の父親が多かった可能性が示唆される。

「子ども観」において、単胎児の父親と多胎児の父親で差がみられたのは、「子育ては自分の自由な時間を奪う」の項目で、多胎児の父親は賛成側が有意に多かった。母親と同様に、育児中の多胎児の父親も単胎児の父親よりも強く育児による拘束感を抱いていることが明らかとなった。田辺（2005b）[23]は、親は子どもや育児に対して肯定的な感情だけでなく、否定的な感情も同時に抱き、親になることによって両価感情を抱くようになることがいくつかの研究で明らかにされていると述べている。育児に関わるほどにこの両価感情は強くなり、拘束感などの否定的感情も強くなると考えられる。

また、「仕事観」において、「仕事は自分の自由な時間を奪う」および「子育て中は、勤務時間を自分で調整できる方がよい」は、多胎児の父親で賛成側が有意に多く、「育児休暇をとると昇進にひびく」は、多胎児の父親で反対側が有意に多かった。青木（2005）[24]は、職場拘束感と育児参加得点が正比例の関係にあったと報告し、「職場に拘束されている」という意識は、実際に親役割を優先させようとするときに生じるものであるとし、積極的に育児に関わることで初めて、職場役割と親役割の間に葛藤が生まれ、職場に拘束されていると感じるようになると考察している。さらに、冬木（2005）[25]は、家事・育児遂行度が高まるほど育児による疲労感、拘束感、イライラなどの負担感が強まること、家事・育児遂行度が低いほど仕事と育児の葛藤や育児意欲の低下を強く感じていることを明らかにしている。多胎児の父親の精神的健康については、特に育児負担の強い乳幼児期において、ワーク・ライフ・バランスとの関係から検討していく必要がある。

双子の父親の自由記載欄の分析からは、【必然的に育児に関わらざるを得ない状況と父親の覚悟】【ふたごの父親ならではの体験】【人間の持つ多様性、個性への気づき】のカテゴリーが抽出された。【必然的に育児に関わらざるを得ない状況と父親の覚悟】については、多胎育児における母親の疲労を目の当たりにした父親が、妻の負担軽減のために必然的に育児参加に関わるようになった状況とそれにかかわる覚悟の様子がうかがえる。西原（2006）[26]は、双子の母親の育児困難感は、単胎児の母親よりも有意に高いことを報告しており、双子の母親がどのようなサポートを求めているかに関する調査[27]では、双子の母親は単胎児の母親と比較して、育児や家事のサポートおよび情緒的なサポートを有意に高く希望していることが明らかになっている。岩田ら（1998）[28]によると、父親になった事実を肯定的に捉え、社会的支持に対する満足度が高く、前向きに努力し肯定的に考えて対処する父親は、ストレスが低いと報告している。田辺（2007）[29]は、乳幼児の父親がもつ「父親になった実感」について調査し、「妻の妊娠・出産」因子での実感の程度が最も高く、つまり、生物学的に親となっていく過程で得る実感が高かったと報告している。また、「子どもとの心理的つながり」因子と「子どもとのふれあい」因子という直接的に子どもと関係する場面での実感の程度も高かったと報告し、「父親になった実感」は、父－子の関係をベースにして得られていくことが示されたと報告している。父親の中には、自分が家族の中心であるという意識があり、そのことを感じる場面で「父親になった実感」を得ている者も見られるという。

双子の父親の多くは、半ば強制的に育児参加を迫られ、気力・体力ともに疲弊しながらも妻とともに双子育児に関わる中で、他では得難い体験を通じて人間性豊かな親として自己成長を遂げていた。加

茂[30]は、私利の追求を至上目的とする価値観が支配的な現代の日本社会において、子育ては割の合わない仕事、あるいはむしろ私利追求という目的に反する仕事になっているという事実を指摘している。しかし、双子の父親たちの中には、一見、私利の追求とは相反する「育児」という体験に半ば強制的に参加させられる中で、その体験にプラスの意味を見出し、自己成長を遂げていた父親がいた。さらに、自己成長という私利のみならず、その経験を他の父親に伝えたいという思いを強く持っており、そこに育児の公共性の一側面を見出していた父親がいた。このように、父親が育児から何を学び、何を得たかを明らかにすることと同時に、その過程での不安や困難感、職場の上司、同僚との関係、妻や子ども、自分たちの親との関係など様々な要因のなかで父親にとっての育児を捉え直していく必要がある。また、中には、仕事と育児の負担から精神的に健康を害した父親もおり、父親の育児負担や育児不安の予防についての対策も重要である。

謝辞

研究にご協力くださったツインマザースクラブの皆様に感謝いたします。

本研究は科研費 MEXT/JSPS（T237927490）の助成を受けたものである。本研究の一部は、大阪大学研究支援員制度の支援により実施された。

引用文献

1）澤田あずさ，明野聖子，吉森有香，工藤禎子　1歳6ヵ月児の父親の労働時間・育児時間からみた母親の育児幸福感　北海道医療大学看護福祉学部学会誌　5（1）　13-21　2009
2）三上知美，掛谷益子　母親の育児ストレスと父親の育児参加に関する研究　インターナショナルNursing Care Research　10（1）　2011
3）神庭純子，藤生君江，飯田澄美子　養育期の家族における育児不安とその要因に関する研究（第1報）家族機能との関連性について　家族看護学研究　10（3）　68-77
4）加藤邦子，石井クンツ昌子，牧野カツコ，土谷みち子　父親の育児かかわり及び母親の育児不安が3歳児の社会性に及ぼす影響：社会的背景の異なる2つのコホート比較から　発達心理学研究　13：30-41　2002
5）土谷みち子，飯長喜一郎，加藤邦子，数井みゆき　父親の養育行動の柔軟性と子どもの発達　牧野カツコ，中野由美子，柏木惠子（編）　子どもの発達と父親の役割　159-171　京都：ミネルヴァ書房　1996
6）尾形和男　父親の育児と幼児の社会生活能力－共働き家庭と専業主婦家庭の比較　教育心理学研究　43（3）　335-342　1995
7）柏木惠子，若松素子　親となることによる人格発達：生涯発達的視点から親を研究する試み発達心理学研究　5　72-83　1994
8）新谷由里子，村松幹子，牧野暢男　親の変化とその規定因に関する一研究　家庭教育研究所紀要　15　129-140　1993
9）田辺昌吾　乳幼児の父親がもつ「父親になった実感」とその関連要因－父親の属性および育児・家事参加度との関連において－　生活科学研究誌　4　2005
10）日隈ふみ子，藤原千恵子，石井京子　親としての発達に関する研究－1歳半児をもつ父親の育児家事行動の観点から－　日本助産学会誌　12（2）　56-63　1999
11）朴志先，金潔，近藤理恵，桐野匡史，尹靖水，中嶋和夫　未就学児の父親における育児参加を心理的ウェルビーイングの関係　日本保健科学学会誌 13（4）　160-169　2011
12）大野祥子，野本（宮崎）玲菜　父親の育児参加：子どもの世話を「する父親」と「したいけれどしない父親」は何が異なるか　生涯発達心理学研究（1）　41-52　2009
13）尹靖水，朴志先，近藤理恵，桐野匡史，中嶋和夫　父親の育児参加の促進・阻害要因に関連する仮説の実証的検討　評論・社会科学　94　15-26　2011
14）高瀬佳苗，河口てる子　3ヵ月児をもつ父親の育児行動と育児に関する学習および態度との関連　日本赤十字看護学会誌　5（1）　60-69　2005
15）中野あい　夫の家事・育児参加と妻の就業行動：同時決定バイアスを考慮した分析　日本統計学会誌　39（1）　121-135　2009
16）横山美江　単胎児家庭の比較からみた双子家庭における育児問題の分析　日本公衆衛生雑

誌　49　229-235　2002
17）服部律子　双子の母親の精神健康度に関与する要因の分析　母性衛生　48(1)　2007
18）北岡英子，杉原一昭　双子育児の実態と育児支援に関する研究（第1報）－双子と単胎児の母親の比較を中心にして－　小児保健研究　61　661-668　2002a
19）北岡英子，杉原一昭　双子育児の実態と育児支援に関する研究（第2報）－母親の希望サポートの分析を中心にして－　小児保健研究　61　669-676　2002b
20）横山美江，清水忠彦，由良昌子，早川和生　多胎児を持つ母親の心身の疲労と育児協力状況　日本公衆衛生雑誌　44，81-88　1997
21）杉山智香　母性意識および次世代育成意識に影響する要因の検討－父親・母親・祖父母・近隣の人々との体験と保育所での体験－　母性衛生　50(4)　543-551　2010
22）福丸由佳　子どもとの関わりと父親の発達：都市部と郡部の地域差の検討　母子研究　18：60-68　1997
23）田辺昌吾　乳幼児の父親がもつ「父親になった実感」とその関連要因－父親の属性および育児・家事参加度との関連において－　生活科学研究誌　4　139-150　2005b
24）青木聡子，岩立京子「幼児を持つ父親の育児参加を促す要因：父母比較による検討」 東京学芸大学紀要1部門　56　79-85　2005
25）冬木春子　乳幼児をもつ父親の育児ストレスとその影響－父親と子どもの関係性に着目して－　家族関係学　24　21-33　2005
26）西原玲子，服部律子，小林葉子，早川和生　母親の育児不安と双生児の精神運動との関連の検討　双生児と単胎出生児との比較から　日本公衆衛生雑誌　53(11)　831-841　2006
27）北岡英子，杉原一昭　双子育児の実態と育児支援に関する研究（第2報）－母親の寄贈サポートの分析を中心にして－　小児保健研究　61　661-668　2002
28）岩田裕子，森恵美，前原澄子：父親役割への適応における父親のストレスとその関連要因　日本看護科学学会誌　18(3)　21-36　1998
29）田辺昌吾　乳幼児の父親の育児・家事行動が「父親になった実感」に及ぼす影響－妻の就業の有無による比較－　家族関係学　26　2007
30）加茂直樹　子育て支援はなぜ必要か　現代社会研究科論集第1号　1-21　2007